



“ニ長調の世界” — ニ長調の名曲を探る



プログラム

“調性”を特集する長調のシリーズ、第3回目の今日はニ長調で書かれた名曲をお送りします。

ボロディンの弦楽四重奏曲第2番は作曲者の代表作というばかりでなく、ロシアを代表する室内楽の傑作のひとつで、妻エカテリーナに愛を告白してから20周年の記念として作曲され、その彼女に捧げられました。第3楽章の美しい夜奏曲は特に有名で、単独でもしばしば演奏されています。パガニーニは18世紀末から19世紀前半に活躍したヴァイオリンの鬼才で、あまりの超絶的な技巧から“悪魔に魂を売って手に入れたのだ”と噂されたり、多くのエピソードに包まれた伝説的なヴィルトゥオーゾでした。数多くのヴァイオリンの為の作品を残していますが、ヴァイオリン協奏曲第1番は最も演奏される機会の多い代表作のひとつで、華やかな技巧と美しい旋律を持った名曲です。ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲は、創作意欲が旺盛で次々と名作が生まれていった頃の1806年36歳の時の作で、格調高い風格と、雄大なスケール感を持っています。ブラームスと並んで古今のヴァイオリン協奏曲の最高峰に位置する傑作です。ドヴォルザークの交響曲第6番は39歳の時に書かれ、作曲者の交響曲のなかでは最初に出版された作品です。第3楽章にチェコの民族舞曲のひとつフリアントを使っていたり、民族色が濃く出ているのが特徴ですが、明快で大らかな響きは、有名な第7番からの後期3大交響曲と並び、ドヴォルザークの魅力を十分に伝える名曲と言ってよいと思います。今回は、ニ長調の名曲をたっぷりお聴きください。

アレクサンドル・ボロディン (1833~1887):

弦楽四重奏曲第2番ニ長調 ~ 第1楽章から、第3楽章(ノットウル)、第4楽章から

東京クワルテット

(1993.9.6. モントルー、コレジオ・パピオ教会でのLive)

ニコロ・パガニーニ (1782~1840):

ヴァイオリン協奏曲第1番ニ長調 op.6 ~ 第1楽章、第3楽章

イヴリー・ギトリス (ヴァイオリン)

アントン・コラー指揮スイス・イタリア放送管弦楽団

(1979.10.16 サンフランチェスコ教会でのLive)

*** 休憩 ***

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op.61 ~ 第1楽章、第3楽章から

アンネ・ゾフィー・ムター (ヴァイオリン)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1980.2.15 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904):

交響曲第6番ニ長調 op.60 ~ 第1楽章から、第3楽章から、第4楽章

ミラン・ホルヴァート指揮オーストリア放送交響楽団

(1978.12.6 ウィーン・ミュージクフェラインザールでのLive)